

「指示→作業」の学習から「問い→解決」の学習への指導改善

～第3学年国語「伝えよう！野菜にかくされたヒミツ」の実践を通して～



小千谷市立塩殿小学校 教諭 小淵 雄一

1 授業改善の視点

国語科「書くこと」における自分の授業を振り返ると、教師の指示によって子どもに書く作業をさせる学習に陥ることが多かった。これでは「考える力」を育てることができないと反省し、授業改善を重ねてきた。

その中で、校内研究としても取り組んでいる「『指示→作業』の学習から『問い→解決』の学習への指導改善」が鍵であると考えようになった。下の表は、子どもの意識の例である。

	「指示→作業」の学習	「問い→解決」の学習
問いの発生	「この文章でいいと思っていたけど、先生が言うから書いてみよう」 手だて(1) →	「そうやって書くと、もっとよくなりそうだな。そんなふうを書いてみたいな」
問いの焦点化	「自分の文章のこの部分を、先生が言ったように書けばいいんだ」 手だて(2)(3) →	「自分の文章のこの部分をもっとよくなりたい。どのように書けばいいかな？」
問いの解決	「先生のように書いていこう」	「こうかな？それとも、こうかな？」
学習のまとめ	「言われた通り書いてみたらよくなったのでよかったです」	「悩んだけれど、こうやって書いたらよくなったな」

「指示→作業」の学習における子どもの姿から、指導上の課題を「子どもが自分の文章に満足している状況を崩せずにいたこと」ととらえた。そこで、問いの発生・問いの焦点化を促す過程に着目

して指導改善を図ることにより、考える力を育てる学習が具現化できると考え、次の三つの手だてに着目して実践を行った。

手だて(1) 問いの発生を促すために、子どもの追求に沿って、教材文ⅠとⅡを提示し、比較させる。

「自分の文章はこれでいい」と考えている子どもに対して、範例的な文章とそうでない文章の二つを提示し比較させる。これにより子どもは、「そんなふうに書いてみたいな」と追求のエネルギーを高め、自分の文章に対する考え方を変え始める。

手だて(2) 問いの焦点化を促すために、教材文の表現方法のよさを話し合う活動を設定し、自分の文章を見直す視点を獲得させ、その視点に沿って自分の文章の改善点を明らかにさせる。

よりよい文章を追求し始めた子どもは、教材文の表現方法のよさを明らかにすることで、「見直しの視点」を獲得していく。ここで獲得した視点に沿って自分の文章を見直させることで、子どもは「ここはもっとよくできそうだな」と自力で改善点を明らかにできる。

手だて(3) 問いの焦点化を促すために、共通教材を提示し、解決方法の見通しをもたせる。

自分の文章の改善点を明らかにした子どもたちは、「どうすればいいか」と解決方法に意識が向き始める。そこで共通教材を提示し、解決方法を

共通理解させる。

このような考え方の具体を、第3学年国語「伝えよう！野菜にかくされたヒミツ」の実践を例にして説明する。

2 授業の実際

本実践では、事柄を羅列して書くことで満足しやすい子どもに、段落を分けて書くことよさや必要性を実感させたいと願い、単元を構想した。

野菜について調べ、伝えたい事柄が蓄積されてくると、子どもたちは「このヒミツを、野菜を育てている家族に伝えたい！」と願いを強めてきた。また、書く事柄は数多くあるが、低学年までに学んだ「時間的な順序」で付箋を並べると文章が書けそうだと思っている状況であった。

本時では、「似ている内容を集めて付箋を仲間分けすると、伝えたいことがよりはっきりするということを理解し、付箋を仲間分けすることができる」をねらいに設定し、授業を行った。

(1) 教材文ⅠとⅡを比較することで、問いが生まれた子どもたち

「時間的な順序」で付箋を並べることで安定していた子どもたちに、教材文Ⅰ（段落分けしてある作文）と教材文Ⅱ（羅列してある作文）を提示した。二つの教材文を比較する中で、子どもたちは「教材文Ⅰの方がいい」と発言し、自分の文章の組み立てに対する考えを変え始めた。



「こっちの方がわかりやすいね」

(2) 自分の文章の組み立てを見直す視点を獲得し、その視点に沿って自分の文章の改善点を明らかにしていく子どもたち

「どうしてⅠがいいのか」と問うと、子どもたちは「段落が分かれているからⅠの方がいい」と

教材文Ⅰのよさを明らかにし、見直しの視点を獲得した。この視点に沿って、「自分の文章の組み立てができそう？」と問うと、「う～ん」と悩む姿が見られた。自分の文章の組み立ては明らかになりつつあるが、解決方法が曖昧な状況であった。

(3) 共通教材を操作することによって、解決の見通しをもち、問いを焦点化した子どもたち

そこで、教師自作の付箋教材を提示した。子どもたちは、内容が似ている付箋を集め、「こうやると仲間分けできるんだ」と段落を分ける方法をつかんだ様子であった。そこで、「自分の付箋を仲間分けできそう？」と問うと、「やってみよう！」と勢いよく声が上がった。

これは、問いを焦点化したという子どもの姿だと判断し、追求課題「自分の付箋を、どのよ



「そうか、こうやっていくと書けそうだね」

うに仲間分けするか」を投げかけた。子どもたちは、試行錯誤しながら、内容が似ている付箋を集め、仲間分けすることで問題を解決していった。

学習のまとめでは、「付箋がいっぱいあった時と比べて少なくなった気がした」と、段落分けするよさや必要性を実感しつつある姿が見られた。

3 終わりに

本実践では教材文ⅠとⅡを比較することを糸口にして、子どもはよりよい文章を追求し、問いをもって思考に向かっていった。このように『問い→解決』の学習を具現化することで考える力を育むことができる。今後も継続して改善を試みたい。